第四三九回　青葉会　令和四年十一月二十四日（木）（於：三軒茶屋しゃれなあど会議室）

選　　者　川口孤舟

出席者　今井紀久男　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　後藤とみ子　在間千恵
佐藤忠重（ただしげ）　西澤國護　長谷見敏（びん）　星田啓子

投句・選句　伊賀山そらお　熊谷國男（くにお）　小早健介　朱牟田静雄（恵洲）　高橋康敏
土谷堂哉　豊田穣（ゆたか）中川雅夫　福島正明　古田昇　宮内規雄　山崎亜也
山田啓子（けい子）　山内天牛　渡邊盛雄

選句のみ　重枝孝岳　庄司龍平　高橋清子　橋口隆　早川允章　山本三恵

《互選句》○は選者の特選　◎は孤舟選者の選

十八点　ガード下に昭和史のありおでん酒　孤舟　（紀・忠・○く・と・孝・龍・康・堂・ゆ・國・雅・び・○允・正・昇・啓・規・天）

十三点　捨てられぬネクタイ勤労感謝の日　忠彦　（紀・く・健・と・龍・恵・堂・ゆ・○正・○昇・○規・亜・盛）

十一点　◎江戸小春御簾のうちより河東節　とみ子　（紀・孤・孝・○堂・允・正・昇・啓・亜・け・盛）
救急の母待つ廊下すき間風　啓子　（○そ・紀・忠・五・と・千・清・雅・隆・び・規）

十点　◎自分史に書けない何か落葉掃く　盛雄　（紀・孤・千・孝・龍・清・隆・規・三・天）

八点　◎和菓子屋に餡煮る匂ひ霜の朝　康敏　（紀・孤・く・千・清・ゆ・啓・亜）

七点　むささびのふはりと闇を連れ来る　孤舟　（紀・清・○康・雅・正・昇・け）
◎廃業のサクマドロップ秋の風　千恵　（紀・忠・孤・堂・正・三・天）
◎石蕗咲くや沖の荒ぶる日本海　康敏　（紀・孤・く・び・允・啓・天）

六点　手拍子の鰯背なをみな酉の市　孤舟　（紀・清・康・允・○啓・○盛）
◎雪吊の松に日の射す武家屋敷　くにお　（紀・孤・恵・康・堂・ゆ）

五点　◎白鳥に古城の景の定まれり　康敏　（紀・孤・健・恵・清）

四点　家々の灯の暖かき冬の町　そらお　（紀・○た・孝・び）
足袋はいて楽屋稲荷に無事祈る　紀久男　（○と・恵・三・天）
魚群となりてハロウィンの交差点　孤舟　（紀・昇・け・盛）
ひとり来て嵯峨の時雨に逢ひにけり　仝　（紀・く・た・○恵）
カーテンに走る鳥影小春かな　五郎太　（そ・紀・く・規）

僻地での単身赴任布団干す　健介　（紀・孤・隆・盛）
◎柝の音も手締めも弾む一の酉　ただしげ　（紀・孤・〇五・と）
沙羅落葉末世語るや庭に満つ　雅夫　（紀・ゆ・亜・三）
木守柿鎌倉殿の業深し　びん　（〇紀・五・亜・け）
妻と家事代はる勤労感謝の日　昇　（紀・健・堂・雅）
ひそやかに枯葉の匂ひ雨踏めば　啓子　（紀・孝・康・雅）
凍豆腐小さき幸せほの甘く　亜也　（そ・紀・と・ゆ）
平和とふ危うき日々の冬木の芽　盛雄　（そ・紀・恵・び）

三点

◎月食を待ちゐる刻やホットワイン　とみ子　（紀・孤・昇）
夕映えの雲つらなりて神渡し　仝　（そ・紀・五）
V字描きこれから何処に渡り鳥　千恵　（紀・健・國）

御贔屓筋による河東節

顔見世や襲名寿ぐ御簾の内　ただしげ　（紀・忠・千）
寄せ鍋や時を埋めたり六十年　堂哉　（紀・國・び）
岩風呂に浸り瀬ノ音紅葉谷　ゆたか　（紀・國・允）
誕生日我が家のきまり栗御飯　國護　（紀・千・康）
秋茜中学校を視察に来　正明　（紀・健・啓）
山茶花や噂話は好きな方　仝　（紀・國・〇亜）
初冬の渋谷にジャズを聞きに行く　けい子　（紀・〇孝・正）

二点

長き夜やテレビを消して二度寝かな　そらお　（紀・隆）
立冬に新團十郎の初日かな　紀久男　（た・天）
叙勲とは無縁の人生文化の日　忠彦　（紀・隆）
助六に東紀の謡ふ冬の宴　仝　（紀・五）
熟し柿残して暮るる小春空　くにお　（た・國）
亥子餅数へてみれば早九年　五郎太　（紀・三）
望遠のはるか先なる鴨の陣　仝　（紀・け）
初冬の来（く）行人坂に富士の見ゆ　とみ子　（紀・隆）
免許証疾くに返納山眠る　健介　（紀・忠）

團十郎襲名公演

静寂の中の「睨み」や秋うらら　千恵　（紀・雅）
月は白赤銅色の月なんて　仝　（紀・五）
肩痛も飛ぶつやつやの新米に　仝　（紀・龍）
落葉掃きふるまうほうび焼けてから　國護　（紀・た）
手に紅葉ケーブル降りて酒とソバ　仝　（紀・千）
空深く浅間の稜線初冠雪　啓子　（紀・健）
日を追ひて熟す蜜柑に子ら騒ぐ　仝　（紀・た）
神発ちて無人の社風走る　けい子　（紀・規）
枯すすきジョブズ遺愛の巴水かな　亜也　（紀・三）

五十回目の泉鏡花文学賞受賞

十一月「陽だまりの果て」届きけり　天牛　（紀・啓）

一点

舞台終へ祝儀で奢る燗老酒　紀久男（忠）
顔見世や成田屋親子へ大歓声　仝（允）
逆転弾！深夜にひとり火酒（かしゅ）呷る　仝（〇龍）
痛ましや隣国ハロウィン大惨事　忠彦（紀）
團十郎立派な襲名冬歌舞伎　仝（紀）
口上の甘辛楽し神無月　五郎太（紀）
顔見世の御簾の内より河東節　仝（紀）
垣根越し咲く大輪の花芙蓉　ただしげ（紀）
稲架（はざ）にかけ天日に干して美味い米　仝（紀）
晋作の影過りたり萩寒し　堂哉（紀）
秋灯や年経て学ぶこと多し　ゆたか（紀）
曙の月静かに思う人の情　雅夫（紀）
イチョウ撮る無数のスマホ人の波　國護（紀）
二代将軍頼家の二尺の墓の赤とんぼ　びん（紀）
ミサイルの飛び交ふ空やけふ無月　仝（紀）
父に似て老いの一徹木の葉髪　昇（紀）
いささかの朱泥の残る冬木立　啓子（紀）
吾（あ）が生（あ）れし十一月の始まりし　規雄（龍）
叔母逝きて車窓に波立つ冬の海　けい子（紀）
セーターまくりワクチン接種五回なり　天牛（紀）
肉叢（ししむら）へ新たな喝や冬至の湯　盛雄（紀）

【句評】

※が付き一字下げたコメントは、採ってはいないものの、気になる点を記したものです。

※　※　※　※　※

十八点句　ガード下に昭和史のありおでん酒　孤舟

くにおさん・・新橋のガード下でしょうか。昭和とくに戦後からの昭和の歴史が凝縮しているところです。その主役はサラリーマン諸君で一日の憂さを晴らしたものです。おでん酒を上五にガード下を下五に語順を変えてもよいのでは。おでん酒がいいですね。

ゆたかさん・・大阪勤務時代にガード下のおでん屋で友人と語り合った頃を思い出します。

康敏さん・・・ガード下の赤提灯にスーツ姿の酔客。現在のの整備された新橋ガード下横丁と違って哀愁があった。

允章さん・・・私の学生時代（昭和三十年代初め）の新宿西口飲み屋街を思い出します。

堂哉さん・・・大阪では梅田のガード下の飲み屋街が正にこれです。上司に諭されたり、先輩に絡んだり、後輩に先輩風を吹いたり。私達より丸紅の人事に詳しい女将も懐かしい。

天牛さん・・・「に」は必要でしょうか。兎に角このような雰囲気の分かる世代は少なくなっていくでしょうね‼

十三点句　捨てられぬネクタイ勤労感謝の日　　忠彦

くにおさん・・ここぞという時に締めた愛着のあるネクタイはどんなに使い古しても捨て難いものです。作者の気持ちがよくわかります。

とみ子さん・・私は、主人のネクタイをさっさと処分していましたので、反省。

龍平さん・・・高級タイのみ３本綺麗に洗濯に出し　この春就職祝いの積りで孫に寄贈したが未だに使ったか報告無し　妻曰く　バカではないの？　エッ誰が？

恵洲さん・・・現役時代の自分自身の勤労に感謝している風情が面白い。

堂哉さん・・・季語の斡旋に脱帽。なんでこんなに買ったのだろう?息子は僅か三四本を義理？で持ち帰りました。

ゆたかさん・・長年の勤務でネクタイも溜まりますが、どのネクタイもそれぞれの思い出があり捨てがたいものです。同感です

昇さん・・・同感です。ネクタイと久しく無縁の生活となりしも、現役時代を偲び断捨離ができぬもの。未練ですかね？

正明さん・・・僕もネクタイが捨てられません。

規雄さん・・・昔はネクタイをしめて、よく仕事をしました。そんな日々を思い出させてくれるいい句でした。ありがとう‼

亜也さん・・・苦労もあり喜びもあった日々への思い。

盛雄さん・・・職を退いたサラリーマンの哀歓が伝わって来る一句。（川柳の大賞に選ばれそうです）

十一点句　江戸小春御簾のうちより河東節　　とみ子

孤舟さん・・・第十三代團十郎襲名披露公演に華を添えた河東節。

堂哉さん・・・初めて鑑賞させて頂きました。思ったよりも長時間の演奏に驚きました。上五がピッタリと感心しました。

亜也さん・・・「江戸小春」がいろいろ語ってくれて秀逸。

盛雄さん・・・I氏の力強い美声を聴きたかったものです。

救急の母待つ廊下すき間風　　啓子

とみ子さん・・すき間風が、作者の不安なお気持ちをよく表しています。

千恵さん・・・私も同じような体験をしました。診断結果を待つ不安な時が表現されていて共感いたしました。

隆さん・・・救急車を今かと待つ間、意外なものに目が行く。臨場感が伝わる。

盛雄さん・・・時空を超えて〝すきま風〟が厳しく伝わって来ます。

十点句　自分史に書けない何か落葉掃く　　盛雄

孤舟さん・・・過去の辛く悲しい経験は、落葉を掃くように容易に消し去ることは出来ない。

千恵さん・・・人間生きていれば後悔や怒りや消去したいことなどいろいろありますよね。何を書けないのでしょうか？　きっとそんなことを考えながら落葉を掃いているのですね。

隆さん・・・自分史の書き方では触れていない箇所。同窓会報にはときどき見かける。「自分史に書けない白地落葉掃く」でも。

天牛さん・・・黙々と落葉を掃いて来し方をふっと思い出しているのでしょう。

八点句

和菓子屋に餡煮る匂ひ霜の朝　　康敏

孤舟さん・・・朝の寒いうちから和菓子の製造に余念がない。

くにおさん・・・食べ物屋はその日の仕込みで朝が早い。ぴりぴりする空気の中に餡の原料となる小豆か金時の匂いが漂っています。職人のたつき（活計）の匂いでもあります。

ゆたかさん・・・和菓子の老舗では、通常店内で餡を練っています。その香りがほんのりと漂ってきたのですね。その店の和菓子はきっと銘菓でしょうね。

亜也さん・・・甘い匂いにつられてつい頂戴しました。

七点句

むささびのふはりと闇を連れ来る　　孤舟

康敏さん・・・夜行性のむささびの行動を巧みに表現している。

廃業のサクマドロップ秋の風　　千恵

孤舟さん・・・長い間愛用してきただけに残念。昭和も遠くなった。

堂哉さん・・・懐かしい菓子です！缶を振って残りを確かめた遠い日！

天牛さん・・・缶の中で残ったドロップが鳴る音が聞こえるようで、懐かしいが淋しい思いがします。

石蕗咲くや沖の荒ぶる日本海　　康敏

孤舟さん・・・福井・東尋坊の断崖絶壁へも容赦なく冬の大波が打ち寄せる。

くにおさん・・・大と小の取合せが面白いと思います。「沖の」と限定しないでたとえば「逆巻く波の日本海」でどうでしょうか。

天牛さん・・・鉛色の荒れる日本海に石蕗が良く似合います。太平洋沿岸に育った人には分からぬ風景です。

六点句

手拍子の鰯背なをみな酉の市　　孤舟

康敏さん・・・鰯背は若い男性に使う用語だが、虚を突いて女性に使っているのが秀逸。マスクでお顔の半分しか見えないのが残念。

盛雄さん・・・中七の〝鰯背なをみな〟が良かった。江戸日本橋の風情が滲む佳句。

雪吊の松に日の射す武家屋敷　　くにお

孤舟さん・・・金沢兼六園の雪吊の松の木と縄が朝日に輝く。

恵洲さん・・・武家屋敷と雪吊りを施された松の凛とした冬景色が目に浮かびます。加賀百万石当たりのご城下？

堂哉さん・・・綺麗な絵はがきのようです。

康敏さん・・・武家屋敷の黒板塀と雪吊りの松。景がよく見える。

ゆたかさん・・・歴史ある町並みの武家屋敷の景が瞼に浮かびます。

五点句

白鳥に古城の景の定まれり　　康敏

孤舟さん・・・松本城のお濠に白鳥飛来。黒い城郭と真っ白な白鳥のコントラスト。

恵洲さん・・・古城と白鳥の取り合わせ（鳥合わせ？城と白のシロ合わせ？）が面白く、ああこれで景色が定まったとご機嫌の作者に同調します。

四点句

家々の灯の暖かき冬の町　　そらお

ただしげさん・・雪が積もり、人通りも少なくなった町の風景が目に浮かぶ。

足袋はいて楽屋稲荷に無事祈る　　紀久男

とみ子さん・・舞台に立つ方の臨場感が 伝わります。

恵洲さん・・・東紀さん関連の句を一句採りたくて。ご本人の句かな。楽屋稲荷というのを知らなかったので、出演前にこれに祈るという景がとても新鮮。

天牛さん・・・最後に足袋をはいてきりりと心がひきしまる感じがいいですね。

紀久男（自解）・・総見当日、客席からは見えませんが、実は怪我をして右膝、左肘を数針縫っていました。簾内は掘りごたつ式の雛段になっており、座る立つの動作は三人がかりで担ぎ上げて貰いました。

魚群となりてハロウィンの交差点　　孤舟

昇さん・・・・渋谷のハロウィンの雑踏風景と思いますが、魚群とは言い得て妙。韓国の梨泰院の大惨事を思い出します。昨今の若者の異常な群れたがり方は不可解です。

けい子さん・・渋谷の交差点の人を魚群とは。比喩が面白いですね。

盛雄さん・・・上五の魚群が愉しい表現です。夜の渋谷の人の動きが伝わって来ます。

ひとり来て嵯峨の時雨に逢ひにけり　　孤舟

くにおさん・・作者は京都の嵯峨の時雨の中で一人感慨に浸っています。時雨は初冬の通り雨のことで山間部によく現れる。「逢ひにけり」に作者の思いが込められていますが、ここは、さらりと「となりにけり」とでもした方が嵯峨の時雨の余韻があるように思います。

ただしげさん・・冬の京都への一人旅、雨に会って寂寥とした感じが身に沁みる。

恵洲さん・・・やや平凡かもしれないが、落柿舎のある嵯峨には時雨が良く似合う。好きな句ということでは雪吊りと接戦の末こちらを「天」に決めました。

カーテンに走る鳥影小春かな　　五郎太

くにおさん・・鳥影の写った瞬間を読み取った将に即興の一句だと思います。

紀久男・・・・障子や網戸に餌をねだりに我が家にもやって来る。

僻地での単身赴任布団干す　　健介

孤舟さん・・・単身赴任の侘しさと不自由さ。奥様のありがたさを痛感。

隆さん・・・・日本経済を支える単身赴任。干す蒲団は重い。「辺地にて単身赴任蒲団干す」でも。

盛雄さん・・・一枚の辞令で動くサラリーマンの勇姿？

柝の音も手締めも弾む一の酉　　ただしげ

孤舟さん・・・今年は三の酉まであるが、今夜の拍子木にも手締めにも一段と力が籠る。

五郎太さん・・「弾む」で、調子良く（三三、四拍子でしょうか）拍子木を打つ音や手を叩く音があちらこちらから聞こえてきます。心も浮き、今年は少し大きな熊手を買おうかな。

沙羅落葉末世語るや庭に満つ　　雅夫

ゆたかさん・・庭に満ちた落葉を見て末世を思い起こす着想がいいです。

亜也さん・・・諦観とは言い切れない遣り場のない瞋り。

木守柿鎌倉殿の業深し　　びん

五郎太さん・・頼朝は弟義経や多くの武家を殺害し鎌倉政権を立てたが、源氏は三代で絶え、あとは北条氏の長い統治が続く。「業ふかし」とは何を指すのか、読む者の想像を促します。次の年の豊作を祈り、一つだけ取らずに残した高い枝先の木守柿との組み合わせが良い。

亜也さん・・・「大河」もひさびさに大人向きで…
紀久男・・・・NHK 大河を観て、義時のことは全く知らず、三谷幸喜の脚本を演じる役者も見事。

妻と家事代はる勤労感謝の日　　昇
堂哉さん・・・最近、家事の大変なことを実感しています！

ひそやかに枯葉の匂ひ雨踏めば　　啓子
康敏さん・・・冷たい雨の枯葉道があざやかに目に浮かぶ。aiko の「雨踏むオーバーオール」を思い出させてくれた。

凍豆腐小さき幸せほの甘く　　亜也
ゆたかさん・・市井の庶民の一人としてのほのぼのとしたつつましやかな生活。下五の「ほの甘く」という表現が利いています。

平和とふ危うき日々の冬木の芽　　盛雄
恵洲さん・・・今年も時を過たず芽を吹く冬木の平和がいつ脅かされるかわからない危うさに同感。ウクライナと言わずにウクライナに心を寄せておられる感じにも好感。

月食を待ちゐる刻やホットワイン　　とみ子
孤舟さん・・・今世紀最後のチャンスとあって、どうしても見たい。寒さしのぎにホットワインを飲みながら。

夕映えの雲つらなりて神渡し　　とみ子
五郎太さん・・上手な句です。西の方角には茜色に染まった雲が何層にも連なっている。そこに西風が吹いてくる。神様はこの季節には出雲へすでにいかれたのだろうか。

三点句

御贔屓筋による河東節
顔見世や襲名寿ぐ御簾の内　　ただしげ
千恵さん・・・江戸時代から続くお旦那衆の究極の芸が今も脈々と伝わっていることに感心します。伝統の文化を市井の人も一緒に伝えて行くとは素敵なことですね。
紀久男・・・日経新聞の私の履歴書に書かれた清水建設の宮本洋一会長や銀座・日本橋・新宿の旦那衆と御簾内でご一緒し最高の気分でした。御手洗経団連会長、三村日商前会頭（同期の本田氏の高校時代の親友）の二人が新規に入られる予定でしたが、コロナ禍の中、稽古などの余裕なかったこと、舞台出演者半減の為実現しませんでした。

誕生日我が家のきまり栗御飯　　國護
康敏さん・・・誕生日が栗のシーズンと一致し、好物の栗飯で祝ってもらえる。幸せですね。

秋茜中学校を視察に来　　正明
啓子さん・・・秋晴れの夕方、作者は母校に立ち寄ってみたのでしょうか。トンボが夕陽を受けてツイと教室に入り込む。秋の陽は刻々とその教室に差し込む陽射しの角度と色を変えていきます。トンボはその光に伴いながら移動して、まるで視察に来ているかのよう。秋茜の擬人化で素朴な童話を読むようです。

山茶花や噂話は好きな方　　正明
亜也さん・・・山茶花は結構賑やかに花がついていて・・・抛り出したような諧謔の味。

二点句

初冬の渋谷にジャズを聞きに行く　　けい子

孝岳さん・・・百軒店の「オスカー」でコルトレーンをよく聴いていたものです。学生時代を懐かしく思い起こして天に頂きました。

紀久男・・・けい子さんのお嬢さんの魅力的なハスキーな声。アルバム2枚出ています。おすすめです。

長き夜やテレビを消して二度寝かな　　そらお

隆さん・・・・　朝かと思いきや、未だ、1時、2時。「テレビを消して」は無くてもいい。「長き夜や二夜を継ぎて朝迎かふ」など・・

立冬に新團十郎の初日かな　　紀久男

ただしげさん・・冬の入りに新團十郎の襲名興行初日とは少し皮肉が効いていて面白い。

天牛さん・・・どのような冬が待ち受けているでしょうか。

紀久男（自解）・・この日、私は出番ではなかったが、楽屋で挨拶してから三階席へ。「待ってました　十寸見会！」と大向うを決めて、新團十郎には掛けず仕舞い。幕見の四階席から歌舞伎座公認の大向うが気の抜けた掛声。おざなりで締まらないこと・・・

叙勲とは無縁の人生文化の日　　忠彦

隆さん・・・・若き日、最高裁事務総長、東京高裁長官を経て最高裁判事だった方の弔問に上がった。授与された勲章が仏壇にお供えされていた。奥様の言葉は覚えていないが、こんなものを頂戴しても夫の死が悲しいとおっしゃったかも知れない。数年後、奥様もお亡くなりになった。

熟し柿残して暮るる小春空　　くにお

ただしげさん・・よく見る風景ながら、季語重なりでやや残念。

※康敏さん・・・季重なりが駄目とは言いませんが、主季語の「熟柿」（秋）に対し下五の「小春空」（冬）も陰暦十月の空を限定する強い季語です。「甲斐の空」にするなど、どうでしょう。

初冬の来（く）行人坂に富士の見ゆ　　とみ子

隆さん・・・・冬は空気が澄んで遠方まで見える。夜7ｋｍ先の東京タワーがインスタ映えする場所がある。秘密だが。「来て見れば冬の富士かな行人坂に」でも。

落葉掃きふるまうほうび焼けてから　　國護

ただしげさん・・落葉は掃きを手伝って、そのご褒美が「焼けてから」と言う下五が面白い。

手に紅葉ケーブル降りて酒とソバ　　國護

紀久男・・・・万里子先生お元気な頃亡き小川恭延さんと私は、伊那に工場があった高橋敏郎さんのご案内で木曾御岳ケーブル上り下りして最高の蕎麦屋で御馳走になったことを想い出しました。目の前で五十雀の敏捷な動きが印象的でした。

空深く浅間の稜線初冠雪　　啓子

健介さん・・・晩秋から冬の空を「深い」と見られたのは正に慧眼。その深みへ初冠雪の浅間が聳えている景を雄大かつ優美に詠まれました。

日を追ふて熟す蜜柑に子ら騒ぐ　　啓子

ただしげさん・・蜜柑の甘くなる季節、子供たちの喜ぶ様が微笑ましい。

枯すすきジョブズ遺愛の巴水かな　**亜也**

三恵さん・・・少々生意気なことを失礼いたします。全く異次元の素材対比は、俳句の醍醐味の最たるものではないでしょうか。そして、改めて「人間」ジョブスの慧眼に恐れ入ります。

五十回目の泉鏡花文学賞受賞
十一月「陽だまりの果て」届きけり　**天牛**

啓子さん・・・天牛さんの大学の先輩のお嬢様が受賞されたお祝いの句のようです。おめでとうございます。素晴しいですね！今年は軒並み文学賞を女性が占めたとのニュースもありました。どの世界でも女性の高評価が目覚ましい。

一点句

舞台終へ祝儀で奢る燗老酒　**紀久男**

紀久男（自解）・・助六撥ねて頂戴したご祝儀で中華料理に行きジョッキで乾杯してから年代物の紹興酒を熱燗で日本飲みいい気分でした。私物の重いリュック、撒き物や楽屋見舞いでいっぱいの手提げ袋が軽く感じられました。

逆転弾！深夜にひとり火酒（かしゅ）呷る　**紀久男**

龍平さん・・・マサカ+まさか+真逆でしたね。来夏パリでラグビーワールドカップがあり次男に一緒に行こうと誘われていたが本気で行く気になりヤシタです。

紀久男（自解）・・クロアチアとの好勝負を観てひとりラム酒で乾杯。

口上の甘辛楽し神無月　**五郎太**

紀久男・・・・仁左衛門の辛口、左團次のおとぼけ、は中々好評。すべてアドリブです。

吾（あ）が生（あ）れし十一月の始まりし　**規雄**

龍平さん・・・「し　と　し」の絶妙な反復鼓動。良いですねェ～

肉叢（ししむら）へ新たな喝や冬至の湯　**盛雄**

紀久男・・・・初優勝を逃した御嶽海のことでしょう。

§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§§

【青葉会予定】　先にお知らせした通り、次回は句会後に年末納会を催行します。

令和四年十二月十五日（木）　会場：三軒茶屋　しゃれなあど（世田谷区施設）４階会議室
時間：十三時～十六時半⬇納会（銀座アスター三茶店）

※十二月は句会開始と同時に　落語（丸紅OB　社会人落語家　花伝亭長太楼）が架かります。
十三時半～十六時半　句会　その後場所を徒歩５分の　銀座アスター三軒茶屋店に移し、青葉会忘年会を開催致します。当日会費を申し受けます。

◇参加者は当季雑詠５句。投句は２句まで。投句締切：十二月十三日（火）中。
◇ご参加のご意向は伺っております。14名の予定です。
投句は今井宛FAX、或いは星田メール宛頂戴できれば句会清記に反映致します。
◇ご参加の方で三軒茶屋しゃれなあどは初めての方は星田（080-8870-8201）までお問い合わせください。ご説明致します。

▣　▣　▣　▣

青葉会報

一、今回はびんさんはじめ10名出席。投句は亜也さん等15名。選句のみは孝岳さんら6名でした。いつものように五郎太さんの披講で、ご覧のように孤舟選者が十八点という高得点、忠彦さん、とみ子さん、啓子さん、盛雄さんも十点を越す高得点でした。千恵さん寄贈の「蓬莱」（飛騨高山）啓子さん寄贈の「〆張鶴」（新潟・村上）、國護さんの缶ビール、小生持参のおつまみ（同期本田氏からのおつまみ。柳橋逸品会）とみ子さん寄贈のゴーフル（風月堂）を賞味しつつ丸紅の日経広告（今年の日経の「広告大賞」受賞作品）、丸紅カレンダー（総務部からは廃止宣言がありましたが、社友会から送られてきました）を回覧しながら順調に終わりました。出品句にありますように、歌舞伎、團十郎襲名披露と小生の河東節出演の話題も多く、賑やかでした。

二、**関係者近詠**

人の腹黒くも白くも秋天下　眞希子
塩麹仕込みつ療養秋暑し　仝
新涼や病後の平熱やゝ上がる　仝
町内の疎遠危ぶむ赤とんぼ　仝
熱中の読書秋の蚊刺さず去る　仝
ちょんと向き変へる雀や秋はじめ　弘子
青き葉と急くかな桜落葉かな　仝
滲ませて洗ふ硯や星の夜　仝
食ひ込める腕の荷の跡つくつくし　仝
鶏の尾の長くしだるる若冲忌　仝

菊人形抱かれ立たされ初舞台　陽亮
菊人形胸高ければ狼狽ふる　仝
菊人形水したたれる高尾かな　仝
煙管叩いて帰り支度の老菊師　仝
右近の「累」
冷まじき殺し場の見得大受けに　紀久男
夜も残暑戦中歌謡高唱す　仝
澄む水辺発句せむとて句帳持ち　仝

――――――「森の座」十二月号（横澤放川選）

酌み交はす同期の桜鮟鱇鍋　允章
茶の花に午後の日差しの温みかな　仝

三、**孤舟選者近詠**

しぐるるや百万石の城下町　烏瓜曳けば寄り来る故郷かな
敬老日光年といふ星の距離　柿の実の高きは鳥に残しおく
粲粲と巫女のかんざし酉の市

令和四年　十二月　十日

紀久男　記